

2007. 第16号

富山大学

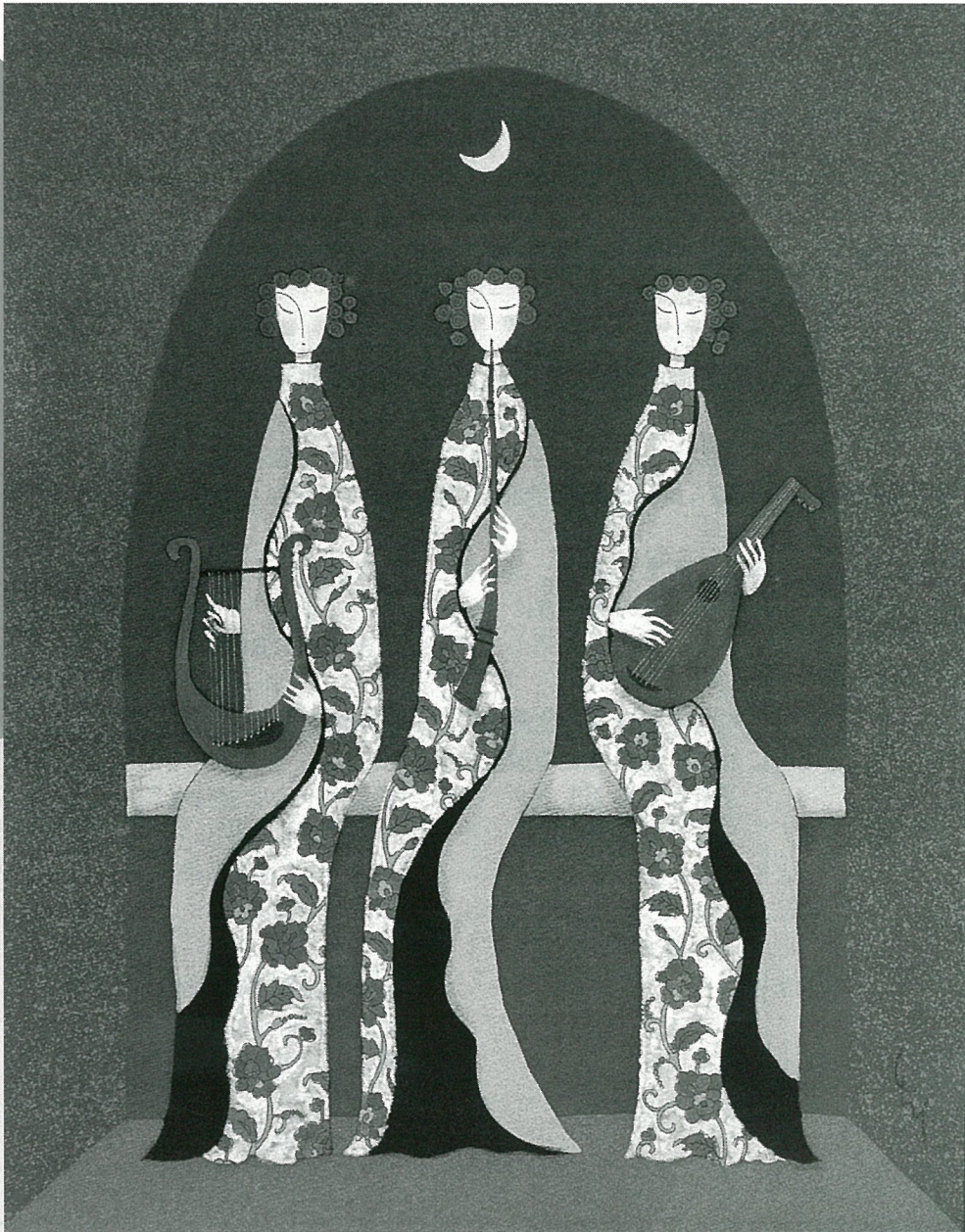
医学部同窓会報



2007. 第16号

富山大学

医学部同窓会報



C O N T E N T S

- 4 . 医学部同窓生の皆様へ 学 長 西頭徳三
- 5 . 3 大学統合から 1 年
— 富山大学医学部は今 — 医学部長 鏡森定信
- 7 . 統合後 2 年目の
杉谷キャンパスのこれから 理事・副学長・附属病院長 小林 正
- 8 . 第 3 ステージ 会 長 高田良久
- 11 . 富山大学同窓会連合会が設立されます
- 11 . ①同窓会ホームページのアドレスが変わりました
②新設 富山大学医学部同窓会のブログを立ち上げました
- 12 . 今年度の同窓会名簿と
今後の名簿のあり方について 同窓会名簿係 耳鼻咽喉科 坪田雅仁
- 15 . 理事の任期制導入、会費納入方法、卒業記念品対象者
に対する決議事項の調査結果 理事長 田淵英一
- 18 . とやま賞受賞 整形外科学 川口善治
- 19 . <特別寄稿>
富山の丘で大志をいだけ 富山大学大学院医学薬学研究部
分子医科薬理学講座助教授 松田直之
- 22 . <特別寄稿>
My life in Toyama-the snow town 賀 剣 英
-



医学部同窓生の皆様へ

学 長 西 頭 徳 三

医学部同窓生の皆様には、お変わりなくご活躍のことと思います。

私は前会報で、本学が平成17年秋、「新・富山大学」として再出発したことをご報告いたしました。繰り返しになりますが、新大学は人文学部、人間発達科学部、経済学部、理学部、医学部、薬学部、工学部、そして芸術文化学部の8学部に加え、和漢医薬学総合研究所、附属病院の10部局を有する、日本海側有数の基幹的な総合大学になりました。このような教育研究資源の多様化・大規模化により種々な動きが加速しており、この1年2カ月はあっという間に過ぎました。

この間に、特に地域医療や医学教育に関する話題が多く、新たな対応が生まれつつあります。その話し合いのベースになっているのは、統合2カ月後の一昨年11月に富山県と交わした『包括連携協力に関する覚書』です。医師・看護師不足に対しては看護学科の充実と地元受験生への対応等が協議されています。ちなみに、富山県内高校卒業予定の現役生を対象とした医学部医学科の[地域枠]には、8人以内の募集に対して20人の出願がありました。他方、教育改革のご報告では、昨年4月理・工・医・薬学分野の融合による「生命融合科学教育部(博士課程)」に第1回大学院生を迎え入れました。

学生たちの間にも積極的な動きが生まれています。一事例を示しますと、医学部学生約20名による「プライマリ・ケアを学ぼう会」の発足があります。会の代表を務める関根有沙さんは取材に対して、「将来は診療所の医師か開業医になりたい。自宅で療養する様子や家族の思いなど、大学病院では見られない患者さんの姿を知ることができた」と明快に答えています(北日本新聞、平成18年11月24日報道)。

近頃、私は新大学の教育のあり方を示すひとつの言葉として、「キャンパスの社会化」を使用しています。この言葉は、大学の構内には多くの若者たちが集うから社会の動きが直接現れるというのがごく一般的な理解かも知れませんが、ところが、私の言う「キャンパスの社会化」とはこのような華やかな現象ではなく、むしろ反対の動きを指しています。つまり、ケータイがコミュニケーション手段であり、自由自在にモードを切り替え、リセット感覚で新しい状況に適應できる「仮想的な現実生きるバーチャル世代」に対して、大学の教育現場に本物の社会を持ち込み、生々しくどろどろした実社会を体験させることを目的としています。学生たちは地域社会と広く深く関わり合うことで、富山のことを直接学び、富山のことを心底心配して根付こうとする人材に育つと思うからです。医師・看護師不足問題と考えあわせる時、医学部学生の新たな動きは実にうれしい出来事です。

地域社会の担い手を育てるのが新・富山大学の責務であり、新大学も二年目を迎えていよいよ正念場を迎えます。卒業生の皆様の忌憚のないご批判とご支援をお願いしたいと思います。

本年が皆様にとって良き年であるようお祈りいたします。

3 大学統合から1年 —富山大学医学部は今—



医学部長 鏡 森 定 信

医療をめぐるさまざまな課題が噴出しています。このような状況下で、北陸の冬を6回は耐えた富山医科薬科大学医学部で学ばれた皆様は、訪れる春を心に描いて頑張っておられることと存じます。

—昨年10月に富山大学医学部となった皆様の母校の現状をお知らせし、合わせて同窓会の皆様に教育、研究、社会貢献などの面でご協力をお願いしたいと存じます。

これらすべての面に関して、現医学部長としましては、地域性と国際性の両面からアプローチし富山の特色を形成すべく腐心してまいりました。

まず教育に関しましては、地域の教育資源と連携した医学教育の実践を強化するために「保健医療人教育室」を開設しスタッフの常駐、学外者への教育教授の称号授与と教育への実質的協力をお願いしています。平成19年度の新入生からは、90人の入学定員のうち8人以内を富山県の高校現役生から「地域枠」として迎えることとしました。大学共通センター試験80%以上の条件で「地域医療に貢献しようとする強い意思とその資質を有する者」を、1高校あたり4人まで推薦できることとしました。カリキュラムでも地域医療との連携を盛り込み、例えば、6年生の選択実習では4週間県内の病院での臨床実習を組み込みました。

海外との連携では、昨年度、文科省に採択された「医学教育の国際化推進」プロジェクトで交流した中・韓、カナダ・アメリカ、イングランド、オーストラリアの各大学との関連を維持拡充に努めています。その中から今年度は、メルボルン大学の医学教育センターの教育専門医師を客員教授そして保健医療人教育室にお願いし、Problem-based learning(PBL)と英語教育を中心に実践力を高めています。韓国仲南大学からは、数名の医学生の研修希望が来ています。また、すでに学術交流協定を締結している大連医科大学とは、入学から卒業まで一貫して英語で行われている医学教育コースの学生間交流について交渉しています。

ついで研究に関しましては、杉谷キャンパスの特徴である和漢医薬学が、全国的研究拠点の認証であるCOEのもと、「テーラーメイドの医療」をプロテオミクスなど先端の技法を駆使した研究を進めています。また、脳研究にあっては、これも全国的先端研究の認証であるCRESTのもと「情動の脳科学」

の基礎研究、さらには今日課題である「情意の発達障害」の国家的プロジェクトでも貢献が期待されています。これらの研究に関しては、同窓生の皆様が中心となって活躍されており頼もしい限りです。また、免疫やウイルス学の分野では、診断や予防の面で特許を取得しながら研究が拡充されています。

臨床面では、附属病院に治験センターが始動し、本学の基礎的研究の成果を新しい治療につながるトランスレイショナル研究(TR)の拠点作りが進められています。東西統合医学研究の成果として、新たなアルツハイマー治療薬が、その基礎的研究を終え臨床への出番に向けて努力が傾注されています。

ご存知のように医学部医学科には、中国・北京大学との学術交流支援を目的に同窓生の保護者の方からご寄贈いただいた「西山基金」があります。これまで毎年2名の方々を受け入れてきましたが、昨年から医学部からも資金を一部手当てし3人に増やしました。研究面でもアジアとの連携を進めるべく、これもすでに学術交流協定を結んでいる内蒙古医学院が創立50周年事業のひとつとして、中蒙医学研究から「蒙医学研究」を分離独立し拡充したのを機に、モンゴル医学研究者の交流を深めていく予定にしております。

最後に社会貢献に関しましては、その中心となる地域の保健医療への貢献度が一層大きくなっています。大学への卒業後の所期研修者の人数が逓減するという逆風の中ですが、500人余りの医師を県内外の医療機関に派遣しており、関連病院は増え続けて、平成18年11月25日の関連病院長会議では176機関となり、さらに150人余りの医師派遣の要請のあることが報告されました。小児科、産科、麻酔科医の絶対数の不足とその偏在を集中的配置で乗り切るべく県と対策協議会を設けて対応しています。社会的にニーズが急増している救急・災害医療では、本学の救急医療部が中心になって立ち上げたNPOが、AEDの研修のみならずプライマリや脳卒中救急の普及に大きな貢献を果たしています。

学生諸君の地域貢献も盛んです。1年生の「福祉施設体験実習」でお世話になった施設で実習後にボランティアとして、各種行事に参加したり、自分たちで催し物を持ち込んだりしています。また、子供たちを対象とした「ぬいぐるみ病院」では、医学科の学生が中心となり、看護と薬学の学生も加わり、子供たちとのふれあいボランティアを行い、保護者の皆さんにありがたがられています。さらに「プライマリ・ケアを学ぼう会」の学生サークルは、地域の福祉医療関係者と相互研修を企画しそれを公開したりして活動しています。

一般市民の方々からは、海外から本学に来られる留学生や研究者に対して宿舎や滞在費の支援などをいただくことも多くなっています。一方、それらを受けた皆さんが、通訳や国際交流事業でボランティアをいただいています。法人化した大学としては、このような相互的社会的貢献を盛んにしていきたいと思っています。海外から来られた方のみならず、医学生諸君においても、家庭状況の激変から学資の確保が困難となり、支援を必要とする事案も出てきています。同窓会諸兄の皆さんにもいろいろな形でご支援をお願いしたいと思っております。

以上、皆様の母校の近況をご報告いたしました。今後とも杉谷キャンパスの自立的運営を引き続き追及していく所存でございます。教育、研究、社会貢献などの面で皆様のご支援を切にお願い申し上げます。



統合後2年目の 杉谷キャンパスのこれから

理事・副学長・附属病院長 小林 正

統合後1年が過ぎ2年目を向かえ、いよいよ組織再編に着手することが理事会でも決まり平成22年には着手実行することになった。教養教育、学部の再編等も含め、人件費削減、1年1%の実行など大学は非常に重要な時期に来ている。さらに、厳しい状況を迎えるのは、地方における医師不足及び看護師不足であり、医療費の抑制も含め大学病院も同様で病棟などの再整備を予定している現在、病院経営にも償還できるだけの実績を示すことも必要である。特に、他の急性期病院と同様、大学病院でも勤務医の労働条件が厳しく、医師・看護師などの労働環境の改善に種々の対応を行っている。今年10月には、女医・看護師などのために保育所を現在の国際交流会館の傍に建築予定中である。また、看護助手や、病棟クラークなども様々な医師・看護師の仕事以外の対応をしていただき、医師・看護師などにはその職業の専門とする仕事に専念していただくことを考えている。幸い、病院は新患や紹介患者が増え、手術件数なども順調に増加し、病院収入は職員の努力で増加し、再整備の条件も満たしつつある。

地元への貢献も重要な富山大学の目標の一つであるが、大学と県との包括提携から、互いに助け合って事業などを行うことになっている。県内の看護師の人数が少なく県から看護学科の学生定員を1学年60名から80名に増加するようにとの要請があり、現在検討中である。既に述べたように県内では医師・看護師不足の状態であるが、知事をお願いして杉谷キャンパスに来ていただき、親しく医学科・看護学科学生に富山県内での地域医療への参加を呼びかけていただく予定（平成19年1月24日）になっている。杉谷キャンパスは医師・看護師・薬剤師の育成機関であり、大学のためにも、県のためにも多くの卒業生に残っていただきたい。そのためには大学自体に魅力のある研修プログラムが必要であり、学生有志と共に現在プログラム委員会を立ち上げた。これにより学生の意見を取り入れた弾力的なプログラムを作成し、来年の研修をすることになっている。大学での魅力ある医療人への研修プログラムとは各個人にあったもので、弾力的なものであるべきであり、そのような方向に進みつつある。

様々な問題に対し、学生、患者、現場の労働者の現状や意見を集約し、その時代にあった対応が必要であり、現在の喫緊の時代に十分考慮した舵取りが重要である。

第3 ステージ

会 長 高 田 良 久

2006年11月、ついに私は50歳になってしまった。

何が変わっただろう。

数年前の写真と見比べればそれなりの年季は入って来た。髪に白いものもちらほらする。

体力は落ちた。開業医になったら、家の中しか歩かない日もあって、人に「食後お腹が落ち着いたら20分は歩きましょう」などと言っている自分が一番歩いていない。

勉強することは増えている。GLP1、DPP4、rimonabantといった、これまでとは趣を異にする糖尿病治療薬が現実になるようだし、日本内科学会生涯教育講演会で聞くほかの領域の変革も著しい。

2003年に発足した我が楽団は、生誕250年を記念して開催した「おめでとう、モーツァルト」大演奏会が文化庁関連の日本芸術文化振興会助成事業に選ばれるなど、順調ながらも安定までにはまだ道は遠そうだ。

子供の将来も気になる。

「普請中」のわが生活、外見や体力は変わったが、変わり映えのしない生活の中で、2006

2006年7月30日「おめでとう、モーツァルト」大演奏会
栃木市文化会館大ホール 栃木合唱団とともに



年10月に出席した富山大学医学部同窓会総会は、重ねた歳月の重み、変わってきた会の形を深く感じる出来事だった。

一つは支部活動だ。私を知るのは首都圏支部だが、東名厚木病院の杉山先生（第1回生）を中心とする諸氏が、首都圏の同窓生を束ねて活発な活動を繰り広げている。

二つ目は同窓会への期待である。医師不足に悩む新潟の小山先生（第2回生）から医師リクルートについて、本学同窓会への期待が熱く語られた。と同時に、本会の運営にも重要な提案がなされた。

開学時、当時の教授有志の先見により同窓会は準備された。これが第1ステージである。1982年、私たち第1回生の卒業とともに本学卒業生の手による同窓会にひとまずなった。今は長野にいる宮林君、空手部主将のいかつさとは裏腹に黙々と事務作業もこなす細やかな宮林君が理事長となって会は新たなステージ、第2ステージを迎えた。

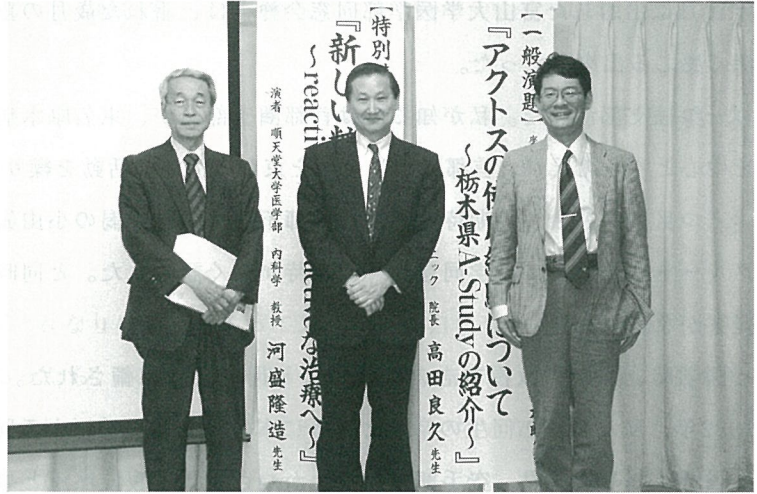
宮林君は先ごろ某生命保険会社のテレビコマーシャルに写真出演し、愛娘との微笑ましい姿が全国に放映された。もっとも私は改めて説明を見るまで「愛妻」と写っているとはばかり思っていたのだが……。いずれにせよその写真は、彼が家族にとっても地域にとっても、なくてはならない存在であることを示していた。

現在、全国で会員のかんりの諸氏が、地域医療の最前線、中核病院の部長院長、大学の講師、助教授、教授といった責任あるポジションにつくようになってきている。本会は新たな形、第3ステージを迎えようとしているように思う。これまでの「やり方」を脱し、新しい発想の下、更なる発展を目指すべきだろう。

権腐十年という。第1回生卒業後24年を経て、当時と大差ない組織というものも考えてみればおかしなものだ。しかし、これまでの本会は会員の多くが研修医、大学院生、平医員など、自分が医師、研究者となることに必死だった時代の役員によって運営されてきた。おとなしめの会となったことは致し方ないとお許しいただきたい。そんな中でも2代目の理事長となった田淵君（第6回生）をはじめ、多くの諸氏が懸命の尽力をしてくださった結果、本会は名簿の整備、会報の発行、記念事業など、堅実な歩みを遂げてきたことは心に刻んでいただければ、と思う。会の新たなステージは、より多くの会員諸氏の思いと知恵とをもって開かれるべきだろう。

佐々木博元学長が常々おっしゃっている支部活動は課題だろう。私の地元の栃木県でも自治医大の稲葉君（第18回生）が厳しい大学院生の立場にありながら動き始めてくれている。時間はかかるだろうが、続けることが重要だ。福地君（第15回生）も栃木市医師会の仲間として

2006年10月4日 佐野市医師会講演会にて、河盛隆造教授、丸山博、佐野厚生総合病院長とともに



訪問を中心とした地域医療に活躍中だ。医療の厳しい世の中だから、仲間は大切だ。

一方、伊藤祐輔元麻酔科学教授からご助言いただいた名簿のいっそうの整備は、個人情報保護法のおおりに受けて、昨今難しいことになっている。担当の坪田君（第19回生）が地道な意向調査を行い、努力してくださっているので、会員諸氏におかれましてはなにとぞご協力くださいますようお願いいたします。

「国や故郷、そして先祖たちへの愛着を感じなくなった子供たちの心が根無し草状態となり、荒んでいくとしても不思議ではない」

2006年12月17日の産経抄氏の主張である。昨年の本会報(第15号)で私は「進駐軍の呪縛一帰属の変容と同窓会の危機」を論じたが、危機はひとり同窓会だけではなさそうである。

絶海の孤島での一人暮らしでもない限り、人と人とのつながりは、好むと好まざるとに関わらず、必ずあるものだ。それを自分にとっての何とするか。

2006年10月22日、栃木市で行われた第2回「健康・食の会」に順天堂大学医学部内科学代謝内分泌講座教授河盛隆造先生をお招きすることができた。講演会実現の基盤には、本学附属病院長小林正先生と河盛先生が大阪大学の先輩後輩の間柄であることが無関係ではありえない。

『街角のエッセイスト』（北日本新聞開発センター編2002：帰るところ）に、「富山の人々は刹那主義の虚無に陥るような仕方で記憶を断ち切りはしなかったのだろう」と書いた。その富山の大学の同窓会である。偏狭な仲間意識に陥るでなく、「進駐軍の呪縛」にとられるでなく、素晴らしい出会い、温かな心強い関わりの場となるよう、会員諸氏のいっそうのお気持ちとお力をあわせていただくことができれば、と思うこの頃である。